依頼者に有利になる話なら、ケンカしてでも聞き出します。

大阪事務所 弁護士 田端孝規

「自分らしさなんてないんですよ、私は。弁護士として特に〝売り〟はない」
遠慮がちに微笑むその人は、大阪事務所のリーダー的存在だ。所内の打ち上げが終わったあとに「2次会行くか」と彼が声を掛ければ、大勢がぞろぞろとついてくる。
「田端さんが行くなら」「楽しそうだから」同僚や部下たちは口々に言う。楽しそうだから、自然と人が集まる。弁護士には自己主張の強い人も多いが、彼は進んで前に出るタイプではない。けれど、とても人望が厚い。「田端さんは、実は人のことをよく見ていて、よくいじってくれる」
愛知生まれ。小さい頃から、本人曰く「ぼーっとしていた」。今も穏やかな性格で、どちらかというと寡黙。お酒が入ると少しだけお喋りになるが、本当は、他人のことに口を挟むことが大の苦手だ。けれど、そんな彼も依頼者の話には積極的に口を出す。
「依頼者が言わないことでも踏み込んで、ほじくり出してでも、汲み取ってあげないといけない。私の性格に反してでも、依頼者が不愉快に感じたとしても、たとえケンカしたとしても、最終的にはちゃんと案件を解決して、依頼して良かったと感じられるようにしないと」
依頼する側は、自分にとって不利になりそうなことや、恥ずかしいと感じることについてはどうしても口をつぐみがちだ。だが、そこに深く立ち入って話を聞かないと、真実は明らかにならない。事実に基づいた供述を得られないと、裁判で勝つことはできない。
「嘘をつきたくないんです。嘘をついて勝つ、みたいなズルはしたくない。弁護士としてそれは越えてはならない一線だと思うし、どこかでボロが出るから」同僚である事務員たちも、電話の受け応えや会話の端々から、田端の真摯な姿勢を感じている。彼が大勢に慕われる所以だ。
〝とりあえず闘え〟弁護士になって間もない頃に恩師に言われたアドバイスを常に胸に抱いて、今日も彼は質問を繰り返す。
「どのような事件でも、依頼者にとっては人生の一大事だから。誠心誠意、解決に向かって力を尽くしたい」

法律のスペシャリストとして、ひとりの人間として。
弁護士も法律事務員も、あなたと同じ目線に立って。
人間としての感覚を大切に、嘘のない態度で、あなたに耳を傾け、真摯に向きあいたい。
人生において、どうにもできない問題を抱えたときに。
平松剛法律事務所は、心から信頼できるパートナーとして、全力で解決にあたります。

人として、人と向きあう。
平松剛法律事務所